

# 特産品である菅の染色に関する研究

製品科学課 西田 公信 生産システム課 早苗 徳光、吉田 巧  
越中福岡の菅笠製作技術保存会 ブランド化小委員会 倉嶋 美智子

## 1. 諸言

富山県高岡市の福岡地区は、古くから菅笠の生産を行ってきており、現在でも各種の祭礼や民踊、時代劇等の伝統文化継承の道具として、根強い需要がある。(現在 5万枚/年の生産)

高岡市でも、奨励を図り、地元の各団体等を通して様々な事業が展開されている。

今回の研究は、菅笠のデザイン性の向上や新しい雑貨製品を開発するために、染色できないかという相談が持ち込まれたことに始まったものである。

## 2. 実験方法

### 2.1 使用材料

菅材料は、高岡市福岡地区で生産されているもので、当所に持ち込んでもらった。

### 2.2 試験及び測定方法

#### 1) 菅素材の染色に関すること

菅素材の染色準備としての精練、そして可染染料の選択を行った。

一般的に市販されている繊維用染料で染色を試みたが、汚染程度に染まるものの、染色という点から言えば不可の状態であった。

そこで、最近ではあまりなじみのない染料(天然繊維用を中心に)をいくつか試みた。

#### 2) 染色した菅素材の染色堅牢度向上に関すること

染色堅牢度(摩擦、光)だけでなく、繊維強度や顕微鏡による概観形状の変化等を調べた。

また、カラーバリエーションについても検討した。

#### 3) 染色した菅素材の編立性に関すること

実際に編立、縫込みを福岡地区で行った。

## 3. 実験結果および考察

### 1) 菅素材の染色に関すること

一つの染料種について、染色可能なことが判明し、それを使用することとした。また、玉ねぎ等の草木

から抽出した染液でも媒染によって可能であるという知見を得た。

染色手順としては、浸水(一晚)、精練、染色、色止め、乾燥となるが、染色後の風合いに若干の硬さを感じられた。特に精練を行うと濃色化するが、行わない方がより自然に近い風合いとなった。

### 2) 染色した菅素材の染色堅牢度向上に関すること

染色堅牢度は、摩擦、耐光共に良好であった。

染色による熱履歴による菅物性の変化についても引張強度で測定したが、強度変化は見られなかった。ただ、顕微鏡による表面観察では、80℃以上の温度によって多少の変化がみられ、それが風合いの硬さに繋がったのではないかと考えられた。

使用した染料は、特殊なもので、現状ではカラーバリエーションが少ない。

### 3) 染色した菅素材の編立性に関すること

リボン状に編立を行ったが、特に支障はなかった。

## 4. 結言

菅を染色するという点では、技術移転も含めて行うことができ、今後、地区や社会のニーズに合わせた独自製品の開発も可能となった。

現在の菅笠主流から、雑貨品への展開も進められるが、鮮明な色などカラーバリエーションがまだ不足しているため、今後の進展が求められる。